

通信

～潟の歴史を未来につなぐ～

2024/04/15



潟さべり

第8号

八郎潟・八郎湖学研究会 発行



八郎潟干拓前の漁の様子 【令和5年5月27日実施の学習会資料より】

『八郎潟はなぜ干拓されたのか』 の合評会を開催しました

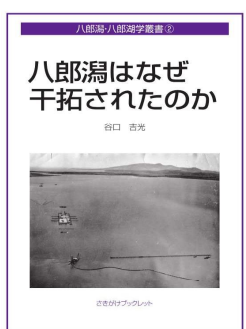
令和5年4月15日(土)、本会の年度総会に先立ち、谷口吉光(秋田県立大学教授)本会会長の著書『八郎潟はなぜ干拓されたのか』について、参加者が語り合う会を開催しました。干拓工事着工(1957年)から65年以上の時がたった今こそ、干拓事業の原点を検証し改めて見つめ直すことで、これから子孫へ残す「八郎潟・八郎湖」のあるべき姿を考える機会とすることが開催の目的でした。

はじめに「『八郎潟はなぜ干拓されたのか』を書き終えて思うこと」と題した講演会を行い、著者の谷口会長から出版に至った経緯や出版後の反響、そして出版を契機にして新たに構想していることなどを語っていただきま

した。その後、意見交換に移り、「みんなで語ろう『八郎潟・八郎湖』」というテーマのもと、参加者からそれぞれの「八郎潟・八郎湖」にまつわる思いを自由に語っていただきました。

約35名の参加者からは、幼い頃の潟の思い出や水質改善を含む環境保全の問題、地域住民が一層八郎湖と関わる場を増やす必要性など興味深い話題が次々と出されました。

「八郎潟・八郎湖は宝物」ととらえ、未来へ生かし繋げる活動に取り組んでいる本会にとっても、今後の事業展開に向けて大いに参考になる、貴重な機会となりました。



『八郎潟の埋もれたお宝』学習会

令和5年5月27日(土)に、天王グリーンランドで『八郎潟の埋もれたお宝』学習会～八郎潟の潟船・漁撈具から学ぶ八郎潟と八郎湖～を開催しました。

この学習会の目的は、現在わずか数カ所で見つかり、展示・保管されている、かつての八郎潟で活躍した潟船や漁撈具に光を当てることで、「埋もれたお宝」として未来の「八郎潟・八郎湖」の在り方を展望することでした。



当日は午後1時30分に天王グリーンランド内のスカイタワー1階に集合し、本会副会長の天野荘平さんを案内人として、はじめにタワー上部にある「潟の民俗展示室」を見学しました。展示室には、干拓される前の八郎潟の漁業で使われた漁具が整然と展示されており、漁具の名前や使用する目的、使用方法などを天野さんから詳しく説明してもらいました。

長い時間をかけて工夫を重ね、脈々と受け継がれてきた様々な漁撈具には、八郎潟ならではの特徴があり、漁師たちの知恵が詰まっていることを実感しました。



「潟の民俗展示室」見学のあと、天王グリーンランド敷地内の西側（海側）の一画に保存されている潟船を見学しました。

この潟船は潟上市指定文化財となっているもので、現在は潟船保存会が管理しています。現在は10艘以上まとめられて展示されていますが、永年にわたり屋外で雨ざらしになっているため、いずれの潟船も痛みが目立ち、このまま放置すれば失われかねない危機的な状況にあることをまのあたりにしました。



潟船は漁撈用具の中でも貴重な役割を担ってきた大切な文化財であり、参加者からも、「後世に残し伝えるためにも、早急に対策が必要だ」という声が上がっていました。

この後、施設内の「キラ★星館」に会場を移し、意見交換会を行いました。



参加者13名と小規模の学習会ではありましたが、予定していた時間を延長するほど、次々と活発な意見が出されました。潟船や漁撈具は間違いなくこの地域の「貴重なお宝」であり、これらを守りながら未来に活かしていく重要性を参加者で共有しました。

バスツアー 『八郎潟の八郎太郎』

令和5年9月3日(日)に、バスツアー『八郎潟の八郎太郎』～伝説を通して知る人々の信仰と暮らし～を開催しました。このバスツアーはコロナ禍により、延期つづきになっていた企画で、待ちに待った末のようやくの開催となりました。

ツアーの目的は八郎太郎伝説ゆかりの場所や八郎太郎信仰について学ぶことで、特に湖畔に生きる人々と八郎太郎の繋がりについて考えることをねらいとして実施しました。

当日は午前9時30分に参加者16名が八郎潟町えきまえ交流館はちパルに集合、八郎太郎信仰に造詣の深い本会副会長の天野荘平さんを案内人にお迎えし、貸切バスで北回りに旧八郎潟の湖畔を一周しました。



見学した主な場所は、順に夫殿権現（八郎潟町三倉鼻）、八郎石祠（三種町富岡）、姥御前神社（三種町芦崎）、昼食（八竜農村環境改善センター）をはさんで、八龍神社（男鹿市船越）、足洗いの井戸（潟上市塩口）です。



三種町富岡の八郎石祠（田森利雄さん管理）

見学地の中で特に印象深かったのは、三種町芦崎の姥御前神社に立ち寄った際、芦崎地区在住の岩谷作一さんから歌手の坂本九さんにまつわるお話を聞いたことです。



坂本九さんの祖父が茨城県霞ヶ浦の「打たせ船」による漁法を八郎潟に伝えたご縁で、九さんが県内公演の合間をぬって、自分の父の生地でもある芦崎地区を訪問し、歌を披露したエピソードは、その場に居合わせた岩谷さんならではの臨場感がありました。小学校の創立記念に送られた体育館用の幕一式も大切に保管されており、見せていただくことができました。



八郎湖の周辺には、まだまだ多くの八郎太郎信仰を物語る祠や石碑が遺されており、これらを丁寧に掘り起こすことが、この地域の歴史的・文化的な価値を再認識する糸口となるように感じました。

また、豊かな漁業資源に恵まれていた時代の八郎潟と人々の暮らしに思いをはせる中で、「八郎太郎伝説」を未来につなげ生かす手立てはないか工夫したいと思いました。

「潟さべり」を開催しました

令和6年1月21日(土)に、八郎潟町えきま交流館はちパルで『潟さべり』～自由に八郎潟・八郎湖について語り合う～を開催しました。

この日は3人の話題提供者からそれぞれの「八郎潟・八郎湖」に対する思いを語っていただき、それを元に会場の参加者からも自由に「自分の八郎潟・八郎湖」を話していただくという形式で進められました。

話題提供をしてくださったのは、児玉亮さん(八郎潟町)、平塚穂高さん(三種町)、津田啓仁さん(秋田市：秋田公立美術大学大学院)の3名です。

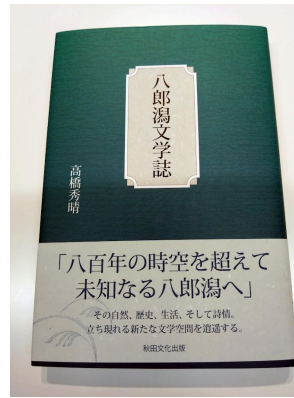


話題提供の児玉さんからは、異業種交流会で取り組んだ水質浄化の実践や、明治期の八郎潟町に関連する絵画や文書を紹介していただきました。また平塚さんからはご自身と八郎潟の幼少期からの関わりや亡きお母様が若き日に出版した詩集から「消えゆく八郎潟」という詩を4編紹介していただきました。

さらに、研究のために秋田に引っ越してきてまだ一年未満という津田さんからは、ご自分の研究の目指すところや八郎潟・八郎湖の魅力などを若く新鮮な視点から語っていただきました。

三者三様の発表は、「八郎潟・八郎湖」という素材がもつ多面的な価値を感じさせてくれる内容だったと、心からありがたく思いました。会場の参加者からも様々な視点から積極的に意見が出され、本会の今後の活動へ向け示唆に富む、有意義な会となりました。

新刊案内



本会幹事の高橋秀晴さん(秋田県立大学副学長)が、このほど『八郎潟文学誌』を上梓されました。この本は秋田魁新報で令和2年4月から翌年8月まで70回にわたって毎週連載され、大好評を博した

『潟の文学散歩』を単行本として再構成して出版したものです。

本の帯に「八百年の時空を超えて未知なる八郎潟へ」とあるように、八郎潟と文学の関わりを、中世から現代に至る視野で作家や作品ごとに詳しく評論した内容になっています。

有名作家たちが八郎潟とどのように向き合ったのかを知ることは実に興味深く、また八郎潟の歴史を知るための重要な資料でもあります。この機会にぜひご一読いただければありがたいです。 出版社：秋田文化出版

会員を募集しています

会員には通信を定期的にお届けするほか、各種イベントの案内、主催イベント参加費の軽減などの特典があります。

- 正会員……………3,000円
- 団体会員………5,000円
- 賛助会員 ……10,000円
(会費はいずれも年会費です)

◎申込について

秋田銀行に振込口座を用意しています。詳細は下記の事務局まで電話やメールでお問い合わせください。

八郎潟・八郎湖学研究会

事務局：秋田県立大学
生物環境科学科 地域計画学研究室
〒010-0195 秋田市下新城野字街道端西241-438
TEL・FAX: 018-874-8686 (NPO法人はちろうプロジェクト内)
E-MAIL: 88gaku@gmail.com
URL: <http://hachiro865.net/hachirores.html>